

【そこにある可能性】

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 崎村 宙央

美しい。岩がきつちりと組み合って形作るアーチ。背中がぞくぞくする。「おーい、いくぞお」というかけ声がきこえてくる。すると、ザァー。水が川面に打ちつけられる音。石橋のまん中、アーチの真上から、水が、さながら滝のように落ちてくる。私はこれが大好きだった。

私は、幼いころ、石橋が大好きだった。私は熊本に住んでいたもので、熊本の石橋をたくさんめぐった。そんな私が、一番好きな石橋が、熊本の矢部地方にある。

通潤橋だ。それは、ただの石橋ではない。水を運ぶ石橋なのだ。

江戸時代、水が湧かず、米が作れない台地があった。そんな台地に恵みをもたらそうと布田保之助という人が立ち上がる。石橋の上に水道管を通す。大量の資金と労力そして時間をかけ、通潤橋は完成した。

なぜ彼らは、そこまでして通潤橋にこだわったのだろうか。それは、水を使って米をつくり、豊かになりたいという願いのためだ。江戸時代、経済の中心は、米にあった。水が湧かない台地では、米はつくれない。米の利益がないということは、村にとって相当の痛手だ。そこで、通潤橋のように水利用が発展していった。水利用が村を豊かにし、経済を支えていたのだ。

その後の日本は、近代化した。ビルや工場が建設される高度経済成長の時代。それに合わせて、水利用の姿も変わっていった。当時の日本では、急激な経済成長に発電所が追いつかず、停電が多かった。そこで、水利用である。谷の間に大きな壁があるのを見たことがある。人工湖を作っている、ダムだ。大型のダムを各地に作り、水力発電をした。そうして、停電を解消していった。日本の高度経済成長を支えていたのは、水利用だったのだ。

だが現代の世の中で、大型のダム建設は、ふさわしくないだろう。大規模なダムを建設するため、環境破壊の問題がある。さらに、コストも

多くかかってくる。

日本には、たくさん川がある。そこで小規模水力発電ができるのではないか。農業用水路や川に水車を設置する。これだけでもいい。これなら人の生活にうまくとけあうことも可能で、自然への負荷も少ない。そのため再生可能エネルギーにも指定されている。

このように、身近に水利用はできる。小規模水力発電は設備が小規模で低コストであり、しかも気候による影響を受けにくいため安定した発電量を得られる利点がある。日本中の川に設置すれば、莫大な量の電気を生み出せるだろう。

そんな中、水を利用した画期的な発電方法が開発された。水と太陽光のみで稼働する水素発電システムだ。水素は、電気分解で水から作り、必要な電力は太陽光発電でまかなう。水と再生エネルギーから水素を作るので、二酸化炭素を排出しない。すごい技術だ。これの本格的な稼働ができれば、エネルギー革命が起こるだろう。

今は、水の流れや蒸発するエネルギーを利用して発電している。だが技術開発により、水そのものを利用して発電することも可能になってくるのではないだろうか。近い将来、もっと効率的で革新的な水利用の姿が生まれてくると思う。

いつの時代でも、水利用が人々の生活を豊かにし、経済を支えていた。水は、日本中のどこにでもある。それらを利用すれば、未来の可能性が広がると思う。目の前にあるコップ一杯の水。私の顔が映っている。近い未来、その水には、何が映っているのだろうか。それは分からない。可能性は無限にあるのだ。

コップの水に映るものは、必ず私たちに恵みをもたらしてくれる。昔も、今も、未来でも。